

# 公認心理師養成課程における大学院生による 学部生に対するピアサポート活動の実践

岩田 光宏,\*† 荒屋 昌弘,\* 坂下 英淑,\* 芹田 卓身,\* 高木 麻未,\*  
筒井 優介,\* 堤 俊彦,\* 中村 千珠,\* 羽下 飛鳥,\*  
日上 耕司,\* 大野 太郎\*

**目的：**公認心理師の養成課程には大学院進学時に進路を選択し直す機会が存在するため、学生の進路選択を支援することが求められる。そのため筆者らは、公認心理師養成課程において大学院生が学部生に対して大学院生活や進路選択などの体験談を語るピアサポート活動を実施した。

**方法：**公認心理師を目指す大学院生による学部生に対するピアサポート活動を実施するに当たり、準備として学部生に対して進路決定や実習に関する疑問や心配事に関して大学院生に訊きたいことを尋ねる自由記述式のアンケートを作成した。その後、「学部生のギモンに大学院生が答える会」という名称で、講座形式で大学院生が体験談を語る時間と、その後の質疑応答を組み合わせたイベントを企画、実施した。

**結果：**全5回の活動に延べ114人が参加し、参加者の感想等から、この活動が学部生にとってのキャリア形成支援になっただけでなく、大学院生にとってのピアサポート活動およびチーム支援の体験になったり、学部生と大学院生が交流するフォーマルな機会になるなどの多様な意義が示された。

**結論：**本研究の活動が公認心理師の養成課程における学内実習として実施されたことで、公認心理師制度が必要とされた社会的意義を体験的に学ぶ機会にもなり、こうした体験は公認心理師として働く際の基盤となり得るだろう。

**キーワード：**公認心理師, ピアサポート, キャリア形成支援, チーム支援

(2022年10月14日受け付け、2022年12月9日受理)

## はじめに

公認心理師制度の充実には養成課程のあり方について検討することが重要である。現在の公認心理師試験を受験するためのメインルートは、大学4年間で心理学を学んだ後に、さらに大学院修士課程2年間で所定の課程を修めることである。すなわち医師や薬剤師と異なり、6年の課程のなかで大学院進学時に進路を選択し直す機会が存在する。学生の立場としては、学部で心理学を専攻するなかで、公認心理師を目指して大学院に進学するか就職等をするかという選択をする必要がある。したがって公認心理師の養成大学には、こうした学生の進路選択を支援することが求められる。

ピアサポートとは、同じ立場や経験を持つ仲間同士

による相互的なサポートであり、その関わりによってサポートされる側だけでなくする側にもさまざまな利点がある。そのため近年、大学において学生同士のピアサポートを促すためにさまざまな取り組みが試みられている<sup>1) 2) 3)</sup>。そのなかで、学生の就職活動などのキャリア支援に関してもピアサポート活動が導入されており<sup>4) 5) 6)</sup>、学生の進路選択への支援には大学教職員からの支援だけでなく、先輩学生による体験を活かしたピアサポートが有効である。さらに、保育士や精神保健福祉士など対人援助職の資格取得に関する養成課程におけるピアサポート活動の実践例もある<sup>7) 8)</sup>。公認心理師を目指す際の進路選択においても、こうしたピアサポート活動が有効であると考えられるが、公認心理師の養成は始まったばかりであり、これまでに

\* 大阪人間科学大学 心理学部 心理学科

\* † 責任著者：大阪府摂津市正雀1-4-1、大阪人間科学大学 心理学科 心理学部  
E-mail : m-iwata@kun.ohs.ac.jp

そのような実践に関する報告は見られない。

また、公認心理師は国家資格として広く国民のこころの健康に寄与することが求められ、そのためには面接室における臨床だけでなく、地域の様々な社会資源との連携・協働に積極的に取り組む必要がある。たとえば、厚生労働省は精神障害者の地域生活を支援するためピアサポートの活用を推進しており<sup>9) 10)</sup>、公認心理師にはこうした活動との連携・協働が求められる。そのためには公認心理師の養成課程のなかで、ピアサポートの意義について体験的に理解しておくことが重要である。しかし、公認心理師の養成大学院の多くは臨床心理士資格の指定大学院であるため、大学院の学内実習は、附属心理相談機関におけるカウンセリングやプレイセラピーを担当する時間に費やされることが多い。また、学外実習では、実習生という立場で各領域の現場に通うことになる。したがって公認心理師の養成課程のなかで、ピアサポートを体験的に学ぶ機会ほとんどないのが現状であると考えられる。

そこで筆者らは、本学の公認心理師養成課程における学内実習として、大学院生による学部生（大学生）に対するピアサポート活動を試みた。本研究では3年度に渡るこの活動について報告し、公認心理師を目指す学生同士のピアサポート活動を通じて、学部生および大学院生がどのような体験を得たのかを示し、こうした活動が公認心理師の養成課程においてどのような意義をもたらすのかについて考察する。

## 方 法

### 1. 事前アンケート

公認心理師を目指す大学院生による学部生に対するピアサポート活動を実施するに当たり、準備として学

部生に対して進路決定や実習に関する疑問や心配事に関して大学院生に訊きたいことを尋ねる自由記述式のアンケートを作成した。アンケートは、本学の公認心理師養成カリキュラムにおける学部の実習科目である2020年度の「心理実習Ⅱ」（3年次配当）の履修生を対象に実施され、延べ42個の回答が得られた。それらを類似する内容に分類した結果、【心理実習】【大学院生の生活】【進路決定】【大学院入試】の4つのテーマが見出された。各テーマにおける回答の一部を表1に示した。

### 2. ピアサポート活動の実践

事前アンケートの結果を踏まえて、イベント形式のピアサポート活動の実施を試みた。具体的には、「学部生のギモンに大学院生が答える会」という名称で、講座形式で大学院生が体験談を語る時間と、その後の質疑応答を組み合わせたイベントを企画、実施した。講座部分は、表1のテーマのそれぞれについて2、3名の大学院生が自身の体験談を語るものであり、その際の司会も大学院生が務めた。質疑応答は、個別相談ブースを設置する形式またはその場で直接質問を受ける形式で行われた。

企画側の大学院生は、本学の公認心理師養成カリキュラムにおける実習科目「心理実践実習Ⅰ・Ⅱ」の学内実習として、この活動に参加した。受ける側の学部生は、公認心理師の実習科目「心理実習Ⅰ」（2年次配当）および「心理実習Ⅱ」（3年次配当）の学生などを中心に広く呼びかけられ、希望者が任意で参加した。

### 3. 分析方法

2020年度から2022年度前期までの2年半の実施状況について、内容と参加者数を整理した。また、活動のなかで大学院生が語った体験談および質疑応答の概要、

表1：公認心理師を目指す学部生が大学院生から聞きたいこと  
(事前アンケートの回答)

テーマ	回答（一部）
【心理実習】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習のイメージがわからない。</li> <li>・実習を受ける際に心掛けた方がよいと思われることは何ですか。</li> <li>・実習に行くにあたって、知識が少ないのに大丈夫なのかなど不安である。</li> <li>・大学院の実習と学部の実習の違いはどのようなものか。</li> <li>・実習ではどういったことを意識しているか。</li> <li>・実習のどのような点がためになったか。</li> </ul>
【大学院生の生活】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院生の勉強や実習のスケジュールが知りたい。</li> <li>・大学院ではどのようなことを学んでいるのか。</li> <li>・大学院に行きながらアルバイトなどはできますか。</li> <li>・大学と大学院の違いを知りたい。</li> </ul>
【進路決定】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院に進んでよかったところとしんどかったところを聞きたい。</li> <li>・大学院進学の手は何だったのか。</li> <li>・大学院進学のために何を始めたらよいか分からない。</li> <li>・大学院進学にかかる費用について。</li> </ul>
【大学院入試】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院の受験の準備はいつ頃から始めたか。</li> <li>・大学院入試の勉強方法について知りたい。</li> <li>・研究計画書の書き方について知りたい。</li> </ul>

表2：公認心理師を目指す大学院生による学部生に対するピアサポート活動の実施状況

	実施日	内容	参加者数	
			学部生	大学院生
第1回	2020/10/14	講座形式による体験談と個別相談ブース	5	8
第2回	2020/12/19	講座形式による体験談と個別相談ブース	7	6
第3回	2021/5/12	講座形式による体験談と質疑応答 ※オンライン開催（LIVE配信および後日の動画視聴）	10※	8
第4回	2022/1/12	講座形式による体験談と質疑応答	19	10
第5回	2022/5/7	講座形式による体験談と質疑応答	24	17
合計（延べ人数）			65	49

※申込者数

表3：公認心理師を目指す大学院生による体験談の概要

テーマ	大学院生による体験談（一部）
【心理実習】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・（学外実習時の）事前知識については実習先の指導者に確認すると良い。私が行ったデイケアの実習では指導者から「参考書を読んで勉強しておいてください」と言われたり、児童養護施設の実習では「特に勉強しなくても大丈夫ですよ」と言われたりした。（#2）</li> <li>・（学外実習について）事前知識に関する不安があるようだが、それよりも挨拶やコミュニケーション、礼儀、定時に来る、ほうれんそう（報告・連絡・相談）等の社会人のマナーが大きく影響する（#2）</li> <li>・（学外実習で）気を付けることは礼儀作法や挨拶などをきちんとすることや、分からないことがあったら実習先の人にすぐに聞くこと。（#3）</li> <li>・実習時間中にしたことを全て暗記できるなら必要ないが、難しいならメモをしておいた方がよい。（#3）</li> <li>・直接自分が支援をする対象者以外の関係者（例えば子どもであれば親御さん）に関わるときに、自分がどのような振る舞いをすれば良いか考えておいた方がよい。（#3）</li> <li>・（実習記録には）理論や考えに基づく考察だけでなく「自分が感じたこと」を書くことも大切である。（#1）</li> </ul>
【大学院生の生活】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・（大学院で休みはとれるのかについて）大学院の1年目では1週間のうち主に3日は授業で、2,3日は実習を行っている。日曜日は授業の課題や資料作成をしているが、授業後に作成しておく日曜日は休める。最初はしんどいが慣れてくるとパッと作れて日曜はゆっくり休めるようになる。（#2）</li> <li>・大学院では学部のときにはない出会いが多い。特に専門家に会える。多くの考え方に触れられるし、自身の幅が広がる。（#1）</li> <li>・（学部と大学院の違いについて）同級生との関係性が少し違う。大学院生は互いに意見を言い合える関係だと思っている。（#1）</li> <li>・大学院1年目と2年目の一週間の大きなスケジュールをそれぞれ説明した（#1）</li> <li>・一人暮らしをしている学部生に対して、一人暮らしをしながら大学院に通う生活上のスケジュールについて説明をした。また課題と生活の両立、勉強の息抜きについても話した。（#2）</li> <li>・社会人学生として大学院に通う生活について話した。（#5）</li> </ul>
【進路決定】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院の進学を決めていたので、就職のことは一切考えなかった。（大学院の選択のために）自分が勉強したい分野の先生を探し、その先生の論文を読んで、先生にメールを送って研究室訪問をした。そこで先生の研究の方向性や相性を確認した。（#2）</li> <li>・（大学院の進学を目指すなかで苦労したことについて）就職する人たちはだいたい進路が決まっているなか、自分はまだなので温度差があったこと。（#3）</li> <li>・大学院で勉強したい分野のこと、大学院の選び方、指導教員の選び方について話した。（#1）</li> </ul>
【大学院入試】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・（大学院入試の勉強法について）学部生の時に受けた授業で使った資料をすべてまとめて、専門用語や理論を勉強し直した。（#3）</li> <li>・（大学院入試の勉強法について）大学院のリーフレットを見て教員の研究分野と過去問を中心に勉強した。また、大学の図書館で教員が書いた本を参考にして勉強した。（#3）</li> <li>・（英語の勉強について）専門分野の英単語を覚える必要がある。（大学院入試の準備は）4年生になってから試験のための勉強を始めても間に合った。（#2）</li> <li>・（大学院入試で苦労したことについて）面接時に「あなたの修士論文が将来社会に対してどのように役に立つのか」と尋ねられたこと。（#3）</li> <li>・大学院入試の出題形式と自分がした勉強の仕方、面接で聞かれること、面接での注意点、研究計画書の書き方について話した。（#1）</li> <li>・面接練習の必要性について話した。（#2）</li> </ul>

表4：ピアサポート活動に参加した学部生の感想および大学院生の感想

学部生の感想	大学院生の感想
<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院生の生活や態度について実際に知れてすごく不安がほぐれた気がしますし、ここから頑張りたいと思います。(＃1)</li> <li>・知りたいことを全部知れた。少し不安が和らいだ。(＃3)</li> <li>・大学院についてぼんやりとした感じだったのが生活とか実習のこととかを聞けてはつきりした。(＃2)</li> <li>・内容を具体的に詰めて回答してくださったため、大学院のイメージがしやすかった。(＃2)</li> <li>・具体的な例や体験談が聴けてわかりやすかった。(＃1)</li> <li>・なかなか聞くことが出来ない大学院に関する事や実習について、知ることが出来た。(＃4)</li> <li>・具体的に質問に答えてくれたので疑問が解消された。実習に向けてどんな準備をすれば良いかわかった。(＃3)</li> <li>・(印象に残ったのは) 座学ではできない、実習でしかできない体験があるということ。(＃2)</li> <li>・大学院生の方の時間割を見ることで、具体的に考えることができたことが良かった。(＃5)</li> <li>・大学院生の方の時間割を見て、授業や実習で忙しそうだと感じたが、授業後の記録がすごく大変そうだと感じた。(＃5)</li> <li>・大学院での生活で、アルバイトとの両立をしている方もいて、うまく時間を調整して大学院生活を送っていると感じた。(＃5)</li> <li>・(印象に残ったのは) 大学院は友達という感覚ではなく仲間(＃1)</li> <li>・(大学院入試について) 面接で意外なところを聞かれることや、おすすめの参考書を具体的に紹介して貰えた。(＃4)</li> <li>・大学院生の方々の個々の勉強方法など具体的に聞けることが出来た。(＃4)</li> <li>・(印象に残ったのは) 大学院入試の勉強法がみんなそれぞれ違った。(＃3)</li> <li>・大学院の選択についてどのようにして調べるかなんぞを知ることができてよかったと思います。また大学院入試についてどのようのことを勉強すればいいのかも知ることができてよかったですと思います。(＃1)</li> <li>・自分で興味のある分野の先生がいる大学に連絡して面接のような形で会うことがすごいと思った。改めて公認心理師の資格取得を目指すと共に、自分は何に興味があるのかを探索しようと考えた。(＃4)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>【全体を通じて】</li> <li>・(大学院生活の) 時間割の図を作って提示していたことがわかりやすかった。(＃3)</li> <li>・(大学院入試のための) 参考書を説明したのがよかった。具体的なものがわかりやすかった。(＃3)</li> <li>・大学院生が親身になって話していることが伝わるような内容だった。参考書や時間割、進路の選択肢なども、かなり詳しく伝えていたのがよかった。(＃3)</li> <li>・その場で出た(学部生からの) 質問に対して、積極的に答えようとすると人が何人かいたのがとてもよかった。(＃3)</li> <li>・実習の体験談を話すことで、自分自身の体験を振り返るよい機会にもなった。(＃1)</li> <li>・前回よりも緊張しなかった。思ったことを話すことができた。(＃2)</li> <li>・前回に比べて全体的により発表ができた。前回の頃と比較して、自分たちの成長を感じた。(＃4)</li> <li>【学部生のサポートに関して】</li> <li>・初めてで緊張したが、学部生のために、と思うとやりがいがあった。(＃3)</li> <li>・学部生に質問をしてくれた人もいて、不安も和らいだという声もあって、やってよかったと思う。(＃3)</li> <li>・ゼミに大学院の先輩がいない場合もある。そういう人は、大学院生と話すことができると思う。(＃5)</li> <li>・自分は大学院生の先輩がいなくて不安だったことがあったので、後輩の不安に伝えることができたと感じた。(＃1)</li> <li>・(他の大学院生が) 体験談を上手に話していた。学部生のために自分の体験を伝えてあげたい、という思いが込められていたように感じた。(＃1)</li> <li>【一緒に活動した大学院生に対して】</li> <li>・自分が積極的に話せたのは、場の雰囲気よかったからだと感じた。他の大学院生が自分の話に頷いてくれていたのが見えて、話しやすかった。(＃3)</li> <li>・他の人の体験談を聞いて、「そうだなあ」と思った。(＃3)</li> <li>・(修士1年目の) 自分としても、修士2年目の先輩の実習の体験談を聴くことができよ機会になった。(＃1)</li> <li>・この活動を通じて、大学院生同士のタテヨコの繋がりが強まったように感じる。(＃1)</li> <li>・会が終わったあとに大学院生同士で「お疲れさまでした」と言い合ったが、そのときに院生が仲間になった感じがした。(＃3)</li> <li>・大学院生みんなでひとつのことに取り組めたことがよかった。(＃5)</li> <li>【今後の課題について】</li> <li>・(開催時期について) 学部3回生が学外実習に行く前(5月頃) に実施できればよいか。(＃2)</li> <li>・大学院の「ケースカンファレンス」について、より詳しく説明すればよかった。大学院での学びの中心であり、学部の授業にはないものなので。(＃1)</li> <li>・学部生同士のピアサポート活動があってもよいのでは。たとえば、3年次生の体験を2年次生が聴く機会など。(＃1)</li> <li>・学部生の参加者が少ないので、この会の必要性について疑問を感じてしまった。(＃3)</li> <li>・(活動の形式について) 講義形式だけではなく、後半を小グループにして対応するなど、座談会の形式にしてはどうか。(＃5)</li> <li>・(活動の形式について) 学部生との関係づくりのためには、「交流会」がよいのでは。大学院生と話がしたい人に来てもらう。講座形式より質問がしやすいと思う。(＃5)</li> <li>・(大学院入試の対策について) 受験する人の結果を保証できないので、あくまで個人の体験談であること、複数のアドバイスをするなどなどに注意する。(＃5)</li> <li>・(大学院入試の対策について) この会が試験対策に偏り過ぎるのは、大学院生の役割としてやりすぎなのでは、と思う。(＃5)</li> </ul>

参加した学部生に対して行った事後アンケートの回答における自由記述の感想部分、および活動後の振り返りのなかで大学院生が語った感想について、それぞれ整理して示した。その際に全5回のデータから、それぞれの語りおよび記述内容について重複するものは省き、一部のみを示した。なお、これらのデータは個人が特定できない情報に加工した上で分析を行った。

## 結 果

### 1. ピアサポート活動の実施状況

2020年度から2022年度前期までの2年半の実施状況を表2に示した。計5回の活動が行われ、延べ114人(学部生65人、大学院生49人)が参加した。なお第3回についてはコロナ禍の影響により、オンライン開催として実施した。

コロナ禍の影響もあり初年度の学部生の参加者は少なかったが、回数を重ねるに連れて増加した。第5回には学部1年次生の参加も見られ、大学入学時における公認心理師資格に対する関心の高さが伺われた。同様に大学院生も増えており、公認心理師を目指して大学院に進学する者の増加が認められた。

### 2. 公認心理師を目指す大学院生による体験談の概要

次に、公認心理師を目指す大学院生による体験談の概要を表3に示した。なお、第1回で語られた内容は(#1)のように表内に示した。【心理実習】のテーマについては、事前知識に不安を感じる学部生に対して、挨拶などのマナーがより重要であるとの指摘がなされた。【大学院生活】のテーマについては、大学院生の1週間のスケジュールを図示して説明する方法が採られた。【進路決定】のテーマについては、就活生との違いなどの体験が語られた。【大学院入試】のテーマでは、具体的な勉強方法などが紹介された。

### 3. ピアサポート活動に参加した学部生および大学院生の感想

ピアサポート活動に参加した学部生および大学院生の感想を表4に示した。なお、第1回で語られた内容は(#1)のように表内に示した。

学部生の感想では、大学院生による具体的な体験談を聴くことで、進路に対するイメージが形成されたり、実習に対する漠然とした不安が解消されたりといった意義が示された。また、複数の大学院生による体験談を聴くことで、各テーマについて多様な考えがあることに気づいたといった感想もあった。

大学院生の感想では、体験談を語ることで自分の経験を整理する機会になった、回を重ねることで自身の成長に気づいた、といった意義が示された。また、学部生へのサポートをすることが他者の役に立つ体験に

なったとする感想が見られた。さらに、共に活動した大学院生の相互の理解が深まったり仲間としての感覚が強まったり、といったサポートする側同士の関係についての意義も示された。活動の課題については、ピアサポートの実施形式に関するアイデアが示されるなど、今後の取り組みに対する主体的な意見もあった。

また両者の感想から、ゼミなどでの先輩後輩関係に恵まれていない学生には、この活動が大学院生と関わる貴重な機会となっていることが示された。

## 考 察

本研究では、公認心理師を目指す学生同士のピアサポート活動として、大学院生が学部生に対して体験談を語る機会としての実践を試みた。活動を重ねるなか参加者は増加傾向にあることが示され、参加者の感想からは学部生、大学院生のそれぞれにとって多様な意義を含む活動であることが示唆された。以下では、こうしたピアサポート活動が公認心理師の養成課程においてどのような意義をもたらすのかについて考察する。

### 1. 公認心理師を目指す学生がピアサポート活動を体験する意義

本研究のピアサポート活動が学部生および大学院生に対してもたらす意義について、図1に示した。まず、公認心理師を目指す学部生のキャリア形成に対する支援としての意義が認められた。大学院進学を選択し直す必要がある公認心理師の養成課程において、大学院生活や進学を巡る体験談は、学部生が進路を考える際の貴重な情報になったと考えられる。大学院入試に関する情報も準備を進めるために直接役立つものだろう。また、公認心理師の養成課程には学部における心理実習が定められているため、大学院生による実習の体験談は、実習に対する不安や疑問に対するメンターの助言として機能したと考えられる。

次に、サポートをする側の大学院生には、ピアサポート活動を実践する機会としての意義が認められた。これまでの自らの経験を活かして他者の役に立つ実感を得たことは、今後、公認心理師として貢献していく動機を高めるだろう。また、体験談を語ることおよびその機会を重ねることによって自身についての気づきが得られたことは、カウンセリングにおけるクライアントの体験の理解にも繋がると考えられる。さらに、大学院生が相互に協力して活動の企画、実践を行うことで、大学院生同士の関係が深まるという意義が認められた。チームによる活動を通じて、相互理解や仲間関係の醸成が実感されていた。この体験は公認心理師の養成課程のなかで、チーム支援および多職種協働の現場で働くために必要な感覚と具体的な技術を身に付ける機会として、重要な価値を持つと考えられる。ピア

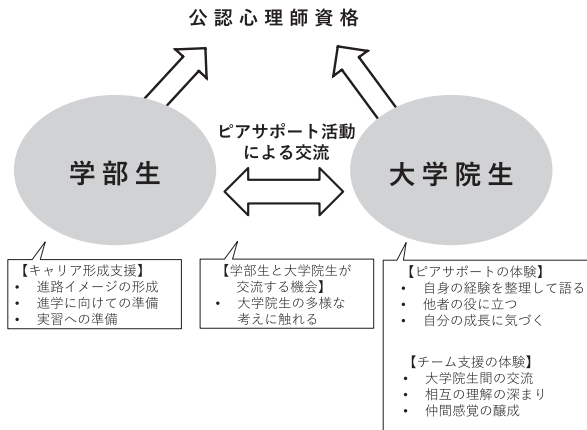


図1：公認心理師を目指す大学院生による学部生に対するピアサポート活動の意義

サポート活動の実践によって以上のような実感が得られることを体験的に理解した大学院生は、公認心理師資格の取得後、お互いを支え合ったり、さまざまなピアサポート活動と協働したりすることが期待できるだろう。

さらに、本研究の活動によって大学院生と学部生が出会い、交流する機会としての意義が認められた。この活動は、公認心理師の養成課程における大学院の学内実習の位置づけとして実施され、公認心理師資格に関心のある学部生なら誰でも参加できるいわば「フォーマルなピアサポート活動」であり、ゼミなどで自然発生的に生じる先輩後輩間のインフォーマルな交流とは異なる機会であった。特にそうしたインフォーマルな交流を持たない学部生にとって、本研究の活動は機会の不平等を補う役割を果たすものであったと考えられる。

なお、平は学生のピアサポートの分類を試み、「対面」・「対話」による個別のピアカウンセリングだけでなく、イベントや新聞の発行およびオンラインによる活動など、「非対面」や「非対話」の形式もあることを指摘した<sup>6)</sup>。本研究の活動は講座形式のイベントであり、対面・非対話が軸ではあったが、個別相談ブースを設置して対話に応じたり、コロナ禍におけるオンラインの動画配信では一部非対面形式として実施した。1対1のカウンセリング形式にこだわらず多様な形式を柔軟に組み合わせることも重要であったが、それらのいずれも大学院生のチームによって行った点に本研究の活動の特徴があると言える。すなわち、ピアサポート活動について、「する側」が「個」で行うのかそれとも「チーム」で行うのかという視点で整理することも重要であると考えられる。そして、意図的にチームによる活動形式を選択することで、本研究のようにピアサポートの意義はより強調されると考えられる。

## 2. 公認心理師の養成課程にピアサポート活動を位置づける意義

以上のように公認心理師を目指す学生にとって本研究の活動が多様な価値を持つ体験であることが示唆されたが、こうした活動をあえて公認心理師の養成課程のなかに位置付ける意義についてはどのように考えられるだろうか。本研究の活動は大学院生の学内実習として行われたが、以下ではその点について考察する。

本研究の活動を重ねるなかで、大学院生からピアサポートの実践形式についてのアイデアが提案されたりピアサポートの役割として入試対策をどこまで行うのかという課題が示されたりなど、活動に対して主体的に取り組む姿勢が強まっていく傾向が示された。本研究の実践によって種を蒔かれたピアサポート活動は、今後大学院生および学部生による自主的な活動へと発展していくことが期待される。本来こうしたピアサポートはゼミやサークル等で知り合った関係のなかで自発的に行われるものである。公認心理師を目指す学生という共通する立場のなかでそうした「インフォーマルなピアサポート」が活発になれば、厳しい公認心理師の養成課程が、相互的に教え援け合うコミュニティへと醸成されていくだろう。

ところが近年、「学生相互の自然な助け合いが生じにくくなっており、相互援助力を活性化させる試みが必要になっている」との指摘がある<sup>11)</sup>。学生同士のインフォーマルなピアサポートは、自然発生的に存在したとしてもその機会が限定されていたり、多忙な生活のなかで気づけば失われたりする儚い営みである。したがって本研究の活動のような、公認心理師の養成課程のなかに位置付けられた、いわば「フォーマルなピアサポート」は、それだけで十分なほど充実した活動である必要はないが、インフォーマルな機会や学生同士の関係性を補い育てる活動として存在することに価値があると考えられる。

さらに言えば、コミュニティにおける相互の支え合いが自然発生的に充足される状況でないことは、学生同士の関係性に限ったことではない。残念ながら現在のわが国では、生活に余裕がなくなるほど、インフォーマルなこころのケアに割かれるものは削られてしまう傾向が強い。そのような状況に対して「フォーマルなこころのケア」を担う専門職が必要とされ、公認心理師という国家資格制度が創設されたのである。すなわち公認心理師には、本来のインフォーマルなこころのケアを補い、時にはそうした活動の種を蒔き育てる役割が求められていると言える。

したがって本研究の活動は、公認心理師の養成課程におけるフォーマルな学びの機会として位置づけられることで、その意義がより深まると言える。フォーマルな機会だからこそ、公認心理師制度が必要とされた社会的意義を体験的に学ぶ機会にもなり、その学びは

公認心理師として働く際の基盤となり得るだろう。

本研究によるピアサポート活動が公認心理師の養成課程において多様な意義を持つことが示唆された。今後はこの実践を発展させるとともに、研究としてはその有効性を多角的に実証していく必要がある。

## 引用文献

- 1) 沖裕貴. 立命館大学のピア・サポート・プログラム：その特徴と課題、今後の展望. 立命館高等教育研究. 2017;16:1-17.
- 2) 春日井敏之, 増田梨花, 池雅之(編著). 大学でのピア・サポート入門: 始める・進める・深める. ほんの森出版. 2020.
- 3) 日下部貴史. 大学におけるピアサポート活動の推進: 富山大学の12年間の取り組みを振り返って. 学園の臨床研究. 2022;21:23-30.
- 4) 大塚順子. 神奈川大学「就活ピアサポーター」: 神大生の神大生による神大生のための就職活動支援. かながわ政策研究・大学連携ジャーナル. 2013;5: 15-18.
- 5) 中川洋子. 立命館大学のキャリア支援領域におけるピア・サポート: JA 活動を「キャリア参入期」の活動と捉えて. 立命館高等教育研究. 2017;16:37-53.
- 6) 平侑子. 学生ピア・サポート活動における非相談型支援の意義と課題: 奈良県立大学ピア・キャリア・サポートを事例に. 奈良県立大学研究季報. 2018; 28 (4):61-78.
- 7) 川上輝昭, 吉田文. 保育職を希望する学生へ就職支援: ピアサポートの試みを通して. 名古屋女子大学紀要 家政・自然編 人文・社会編. 2015;61:345-354.
- 8) 山田妙詔. 精神保健福祉援助実習後における実習教育に関する考察: ピア・スーパービジョンの試みを通して. 日本福祉大学社会福祉論集. 2017;136: 203-210.
- 9) 厚生労働省. 「ピアサポートの活用状況に関する調査」報告書: 平成26年度精神障害保健福祉等サービス提供体制整備促進事業に関する調査研究. 2015.
- 10) 厚生労働省. 精神科医療機関におけるピアサポートの現状と活用に関する調査報告書2022, (2022年10月10日閲覧, <https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000963578.pdf>)
- 11) 日本学生支援機構. 大学における学生相談体制の充実方策について: 「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」2007, (2022年10月10日閲覧, [https://www.jasso.go.jp/gakusei/publication/\\_icsFiles/afieldfile/2021/02/12/jyujitsuhausaku\\_2.pdf](https://www.jasso.go.jp/gakusei/publication/_icsFiles/afieldfile/2021/02/12/jyujitsuhausaku_2.pdf))

# The Practice of Peer Support Activities for Undergraduate Students by Graduate Students in a Certified Public Psychologist (CCP) Training Course

Mitsuhiro IWATA, CPP, PhD,\*† Masahiro ARAYA, CPP, MA,\*  
Hidetoshi SAKASHITA, CPP, MA,\* Takumi SERITA, CPP, MA,\*  
Mami TAKAGI, CPP, PhD,\* Yusuke TSUTSUI, CPP, MA,\*  
Toshihiko TSUTSUMI, CPP, EdD,\* Chizu NAKAMURA, CPP, PhD,\*  
Asuka HAGE, CPP, MA,\* Koji HIKAMI, CPP, PhD,\*  
Taro ONO, CPP, PhD\*

**Objectives** : In a certified public psychologist training course, students must choose to go on to graduate school, and therefore it is necessary to support them in their career choices.

**Methods** : We conducted a peer support activity in which graduate students in a CPP training course shared their experiences of graduate school life and career choices with undergraduate students.

**Results** : A total of 114 people participated in all five activities. This activity provided career development support for undergraduate students, peer support activities and team support experience for graduate students, and a formal opportunity for undergraduate and graduate students to interact.

**Conclusions** : The activities of this study could serve as a foundation for graduate students' future work as CPPs.

**Key Words** : Certified public psychologist, Peer support, Career development support, Team approach

(Received in Oct 14, 2022, Accepted in Dec 9, 2022)

---

\* Department of Psychology, Faculty of Psychology, Osaka University of Human Sciences.

\*† Corresponding author : Department of Psychology, Faculty of Psychology, Osaka University of Human Sciences. 1-4-1, Shojaku, Settsu, Osaka 566-8501, Japan.

E-mail : m-iwata@kun.ohs.ac.jp